

発達障がいを抱える人たちの心理療法に表れるイメージについて

中井 由佳子

I はじめに

発達障がいの研究は、1943年のKanner, Lによる詳細な子どもの事例報告によって「早期幼児自閉症」と命名されたことに端を発する。その後、さまざまな変遷をへて、Wing, L (1981)によって提唱された概念により、1980年代中頃から自閉症の症状はスペクトラムをなすと考えられるようになる。このスペクトラムという考えは、「対人的相互交流の障害、言語的および非言語的コミュニケーションの障害、想像的活動の障害」の、主要3症状が典型的に揃う者からそうではない非定型の者までを含み、また知的に重度の遅れの者から高機能などの知的に高い者も含めて、自閉症の症状がスペクトラムという連続体を形成すると捉えることである。

自閉症の診断基準について、わが国では1960年代後半頃に、厳密な診断基準をめぐる論争が繰り広げられた。しかし、1980年代中頃より、自閉症が何らかの生物学的要因によって起こる発達障がいであると理解され、症状は発達過程依存的にその様相を変えていくことや、社会的相互作用の質的障がいは生涯にわたって社会的適応を妨げるという理解が定着していった。そして、自閉症を連続体として捉えることの重要性が認識されて、「現在では、自閉症と言えば自閉症スペクトラム障害を意味し、また広汎性発達障害と同義であると理解するのが一般的」(山上, 2007)になっている。また、最近ではADHDやLD、高機能自閉症、アスペルガー症候群なども含めた「発達障害」という用語が広がっている。

II. 問題

1. 発達障がいを抱える人たちの心理療法

わが国では1960年代後半頃、遊戯療法と保護者へのカウンセリングが自閉症を抱える人たちに盛んに行われていた。しかし、自閉症スペクトラムの病因論が、小児期の精神疾患と捉える心因説から一転して、1967年のRutter, Mらによる器質障害に基づく認知言語障害説が展開するにつれて、遊戯療法よりも行動療法的なアプローチが主流となった。しかし、先述したように、1980年代中頃からの自閉症の症状が生涯を通じて持続するという理解が定着するにつれて、発達特性を踏まえたTECCH (Treatment and Education of Autistic and related Communication handicapped Children)などの治療教育プログラムやSST (Social Skill Training)などの心理教育プログラムが重視されるようになる。そしてこの頃より、遊戯療法のような心理療法の意義が再度問われはじめた。それは、乳幼児精神医学や精神分析からの知見の積み重ねによって、母子の愛着形成が子どもの認知発達を促進することや、認知発達の障がいアイデンティティの発達への障がい

に関わることが明らかになったこと、自閉症スペクトラムを抱える人たちの内的世界が自伝によって報告されてその人たちの特異な体験様式や体験している心理的脅威の深さが知られるようになったことにかかわる。

近年では、脳科学の研究もすすんで、自閉症スペクトラムを抱える人たちの脳機能の特異性がよく知られるようになってきている。そして、滝川（2007）による、関係発達の遅れが顕著な子どもの大脳における成熟の遅れた部分について、大脳における成熟の遅れが関係性の発達を遅らせた原因なのか、関係性の遅れが成熟の遅れの結果なのかはわからないとの指摘や、「脳の障害が先天的か後天的かによって発達障害に違いはない」という杉山（2007）の考えが生まれてきている。また、十一（2006）は、「扁桃体一辺縁系障害説」を提唱し、感情の発現や他者の感情理解、他者の視線に対する応答などに関わる扁桃体の異変が「成熟遅滞」であることを剖検研究により見出し、滝川（2008）も同様に、「精神の歩みの『遅れ』」と述べている。こうした脳の障がい永久的なものではなく、社会性の障がい説が主流となるにつれて、療育の有効性が裏付けられ、心理療法の意義も見直されてきている。

山上（1997）は、自閉症スペクトラムを抱える人たちへの援助として、「“今ここでの適応”をめざすのではなく、特異な発達障害の実態に目を注いで、調和のとれた発達を援助し、また主体的な体験世界に目を注ぎ、個性化の道を援助する」ことを重視している。発達障がいを抱える人たちが、発達の課題を抱えながらも自分の人生を主体的に生きられるように寄り添うためには、個性化を目指すような心理療法が大切であると筆者は思う。

2. 発達障がいを抱える人たちの内的世界

筆者が、療育教室で出会ったある自閉症スペクトラムを抱える子どもとの体験で、印象的な出来事がある。その子どもは、砂を手にとって目の前でぱらぱらと落とすことを繰り返していた。行動だけを見ると、自閉症スペクトラムの主要特徴である同一性保持として片付けられるかもしれない。しかし、恍惚とした表情で砂を落とし続ける姿を見て、筆者には見えない何かが見えているのだろうかと感じて、同じように落とし続けてみたり、情緒を受け取ろうとしたりした。そして、何か見えているのだとしたら、外の世界は豊かでもあるが怖いものでもあるのかもしれないと考えるようになり、内的世界をもっと共有したいと思っていた。自伝を記した、Williams, D（2001）は、日本の「自閉症実践療育セミナー」へのメッセージで、「もし自閉症者の内面世界から、自閉症に希望と理解のための手がかりを求めるなら、その答えを示してくれる人たちは、あなたのそばにも、いるに違いありません」と述べている。

最近では、自閉症スペクトラムを抱える人たちによるこうした自伝が表されるようになり、その人たちの生きる世界が実感を持って伝えられるようになった。その自伝への解説のなかで内山（2004）は、自伝から得られるものは、自閉症スペクトラムを抱える人たちの視点から語られる自閉症スペクトラムの特性だけではなく、「もっと重要なのは自閉症の人の視点から見た『多数派』あるいは『定型発達』と呼ばれる非自閉症者の行動特性である」という。そして、多数派の人々は自分たちの価値観が正しいと思っていて、その身勝手さが教育という名のもとに押し付けられるが、そのことを疑わない愚かさや傲慢さに気付かせてくれると伝えている。

皆藤（1998）は、多様性の現代を「いかに生きるのか」という視座からみたとき、従来の直線

的発達段階論の捉え直しが必要であると考え。そして、「生きる視点からみた発達観」という捉え方を提唱し、その視点からみるとときにはじめて、子どものメッセージを受け取る姿勢がもたらされるという。この視点は、障害など当人が抱えている外的・内的テーマが、当人をめぐる現実との関連のなかで、いかに変容していくのかというテーマを体験として生きる見方であり、人生とたましいとの間のつながりを見出すことであると述べている。

心理療法において、自閉症スペクトラムを抱える人たちの内的世界を理解し、自分たちの価値観を見直しながら、出会っていくことは大切だと思われる。本来心理療法は、自我や主体性を確立した人たちを対象とした神経症モデルに依拠し、象徴化やイメージの力を有していることを前提としている。そのことから考えると、自我や主体性の育ちの弱さや、象徴化やイメージの力に弱さを持つ自閉症スペクトラムを抱える人たちに心理療法は有効ではないのではないかという疑問が生じてくる。しかし、主体性や象徴化の形成そのものを心理療法の目的とすることも、心理療法で表現された内的世界を通して報告されている。田中（2009）は、セラピストが自らの主体をぶつけることで初めて、主体なきクライアントの側に主体が立ち上がる契機を生み出すことができるのだという。また、平井（2008）は、「象徴化能力の欠損は、関係性の障害の結果である」という考えから、象徴化の形成を心理療法の目的とするという考えを述べている。

3. 発達障がいを抱える人たちの心理療法に表れるイメージ

筆者が発達障がいを抱える人たちの内的世界を共有する手がかりにしてきたのが、心理療法でクライアントによって表されたイメージや、それにもなうセラピストである筆者のイメージであった。ヒステリー、統合失調症、境界例などは、それぞれの時代を物語るものといわれるが、現代において、発達障がいを抱える人たちは何を伝えようとしてくれているのだろうか。

山上（1997, 1999）は、自閉症スペクトラムを抱える子どもたちの臨床例を検討する中で、人格の変容の時期に元型的イメージが出やすいと述べる。元型的イメージは、Jung, C. G. によると、無意識の中でも、個人の人生や経験に由来する個人的無意識の層よりも深いところにある、時間と空間を越えた全人類の経験や蓄積された普遍的無意識という層から現れるものであり、人間の現実の行動、成長、人格の形成など、全般にわたって影響を与えているとされる。こうした元型的イメージの出やすさについては、個性的で複合的な意味的世界の育ちに困難を抱えていることが、危機にも新生にも移行し得る自我の脱皮のような時期に、個人的イメージよりも集合的なイメージを意識に上げやすくしているのではないかと山上は考えている。そして、その元型的イメージは、その人たちの人生に生命と力を吹き込むものであり、自らの生命の根源から“命の水”を汲み上げつつ進む、個性化の象徴でもあるという。

また、Kawai（2009）は、PPDとADHDを持つ子どもとの心理療法の事例をもとに、初期のJung, C. G. による、意識と無意識をつなぐ第3のものとしてのイメージの捉え方を見直し、イメージや治療関係を通じて、結合と分離が生じてくることの大切さを指摘している。

これまでに述べたように、発達障がいを抱える人たちへの心理療法の意義が再度認められるようになり、発達障がいを抱える人たちの心理療法のあり方も見直されるようになってきている。筆者は、発達障がいを抱える人たちに弱さがあると言われるイメージの視点から見直したいと思う。次節に提示する思春期男子事例では、クライアントが表すイメージに添っていく中でクライ

エントのイメージは変容していき、筆者のイメージも変容していった。また同時に、筆者や日常での母親や同性の友人との関係性も変化した。

本稿の目的は、この事例に表れたクライアントのイメージと、それにとまなうセラピストである筆者のイメージを通して、発達障がいを抱える人たちの内的世界や、私たちに伝えてくれるメッセージ、発達障がいを抱える人たちの心理療法について考えることとする。

Ⅲ. 事例経過

以下に提示するのは、初回時 13 歳の男子 A の心理療法過程である。(守秘の関係上、考察に影響のないところは削除している。「」は A の言葉、<> は筆者 (Th) の言葉。)

A は、日常での困ったことなどを支えてもらえることを希望した母親 (Mo) の勧めで来談した。幼児期の運動発達は早めで、歩き始めると多動になった。対人面では、Mo や特定の他者への愛着形成はないが、人見知りは少し見られた。初語は 1 歳で、言葉や指差しでの要求はある。1 歳半を過ぎて他者との興味の共有や社会的参照、模倣や甘えは見られなかった。1 歳で保育園入園となるが、先生がかかりきりで、他児への関心はなかった。3 歳半健診で発達の偏りを指摘され、就学まで療育教室に母子で通う。小学校では、音の敏感さや多動が目立つ。3～6 年時に地域の教育相談に通所。6 年生時に小児科において、心理検査や診察、Mo からの生育歴聴取の結果から、高機能自閉症の診断を受ける。中学校では、規則や先生の指示を忠実に守り、学習上で特別な配慮の必要性はなかった。休憩中にはロッカーに頭を入れていて、他の生徒との関わりはない。家ではかんしゃくが激しかった。興味のある遊びは、幼児の頃から続くレゴの組み立てや、小学校時代から続くガンダムのプラモデル作りが中心だった。

初回の A は、入室時に視線はそらしつつ丁寧にうしろ向きをする。先に 1 人で部屋に入り、うれしそうにするが Th が入ると興味のないふりをする。面接の説明は、視線はそらして身体をそわそわさせながらもじっと聞く。「試し」と遊ぶことが多く、Th を警戒して試している感じを受ける。外見は、年齢相応の背丈にぼつちりめで、全体には年齢より幼い印象。2 回目。Th の話しかけにシャッターを下ろす感じだが、自分を守るためにつけた力のように Th は思う。箱庭に興味を示し、A を表すような小さなライオンと馬を背中合わせに中央に、周囲に大きなくもとゴリラ、くじら、わし、コブラを置く。周囲の世界が脅威に満ちて身動きがとれない様子が伝わる【箱庭 1・写真 1】。退室を惜しみ、大きく手を振って帰る。

3 回目に別室で WISCⅢ を実施。言語性課題は姿勢が崩れて集中力が落ちるものの、符号以外の動作性課題には意欲的に取り組む。言語性 100、動作性 117、全検査 109、言語理解 105、知覚統合 121、注意記憶 91、処理速度 100。下位検査で算数 (評価点 7) や理解 (評価点 6) などの聴覚的な理解や記憶が落ち込む。4 回目。前回と同じライオンと馬、加えて象とキリンが真ん中右下に、左に前回のゴリラ、右に恐竜が出現。「科学技術で巨大化させられて暴れ出した」ゴリラが木を激しく倒して回り、「ゴリラをやっつけるために来た」兵士が、戦車とヘリコプター、銃で倒そうとするが、ゴリラは全く威力を失う様子はない。そこに現れた 8 匹の蛇と前回のコブラが兵士たちに攻撃を加え、1 人の兵士がコブラに捕まる。わからない敵とやみくもに戦っているようにも Th には見える【箱庭 2・写真 2】。



【写真1・箱庭1】



【写真2・箱庭2】

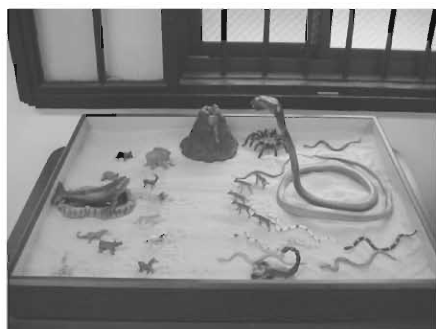
見立ては、幼児期に発達年齢相応の特定の他者との愛着や経験の共有がなく、相互関係のとりにくさや、遊びの限定があり、現在も、相互的な関係のとりにくさや遊びの限定は続き、自閉症スペクトラムと考えられた。箱庭からは周囲のものや無意識的なものを脅威に感じやすいこと、面接からは他者への警戒や防衛が強いことがうかがわれた。面接の方針として、Aの興味を持つものや内的世界に添い、侵入的にならないように、遊びや情緒を共有できる関係性を築いていくこととした（1/M・50分・有料。Aの希望により5回目以降は1/2W）。

次第にAは日常の関心事を話したり、遊びを共有しようとする気持ちを表したりするようになり、好きなガンダムについて熱心に話す。Aの語りによると、ガンダムのパイロットである15歳の少年は、はじめは大人の言うままに戦うが、知らない間に戦わされていたことに気付き、何のために戦うのかと疑問を持つ。少年は、同性の仲間関係を築き、母からの分離を試みながら、本当の敵を知り、戦いのための強さを身につけるのに何が必要なのかを問い続ける。そして少年自身が認識力を拡大させることの大切さを見つけ、少年は環境に合わせて柔軟に変化ができるようになる。その後、憎しみのためではなく守る人のために戦うことに気付いた少年は、男の子としての内的成長を遂げ、戦いのための真の強さを身につける。その後の回では、クラスの子から意地悪をされていて、「どうしたらいい？そのためにThがいるんやっけ」と訴える。初めて切なくて締め付けられる情動が伝わるようになる。

10回を超え、Thを見て目が合うと恥ずかしそうにしたり、Thにつられて笑ったり、退室渋りが増える。「番長」の黒と「生徒会長」の白のガンダムを戦わせ、次の回には、黒と白を組み合わせる。影を取り入れたよう。その後、箱庭。左手にライオン、ヒョウ、小動物やくじらが右向きに、右手にコブラ、8匹の蛇が左向きに現れる。中央に活火山。続いて右手に大きなさそり、5匹のハイエナ、大きなくもが出現。くじらの下に水を置く。「火山は爆発するかどうかわからない。ハイエナは本当は左に来るべき」と1匹左に移すが、「裏切ったかも」とすぐに戻す【箱庭3・写真3】。戦うものがはっきりした印象。コブラなどの蛇との対峙は、現実のMoや母親イメージからの分離の必要性を、くじらは、脅威の中から守ってくれるものや心の中にある治療的な部分の発見を示し、自我境界が弱く世界の意味づけが困難なために混沌としていたAの世界が分化し、意味を持ち始めたようにThは感じた。

この頃日常では、Moへの甘えが強まり、身体接触を求める。かんしゃくはなくなる。一緒に行動する友達ができ、ロッカーに頭を入れる姿が見られなくなる。しかし、裏切られることもあり、「強くない」と言う。部活や課外活動では自信を持つようになる。

20 回目以降、中学校での居心地のよさや、他の生徒との交流の伺える話題が増える。「ここに来るといつも眠くなる。ゆっくりしに来るんやな」と、勉強の大変さを語る。毎回一つ一つ丁寧に作り上げることで、男の子としての身体像を作り上げるようであったガンダムのプラモデルを箱庭の左上に置き、戦車や兵士、ミサイルと対峙。電柱が倒れ、飛行機やヘリコプターが墜落。兵士やトラック、信号機が増え、ガンダムの近くに兵士が移動。敵のガンダムに盾を持たせ、戦いは激しさを増し、最後に右下にテントができる。左上のガンダムが、Th には力強く見える【箱庭4・写真4】。37 回目は、宇宙忍者バルタン星人を出し、「なつかしい…」とウルトラマンコスモスについて、Aは以下のように語る。コスモスは、怪獣好きの人がウルトラマンになり、宇宙忍者バルタン星人を追って古代から地球に来た。「月の優しさ」（防御力に優れ、相手を攻撃せずに敵の力を受け流す）と、「太陽の強さ」（攻撃力に優れる）の二面性を持つ。怪獣と人間の共存を願い、何らかの原因で暴れ出した怪獣は殺したり傷つけたりせずに無害化して保護する。宇宙忍者バルタン星人は、古代では人々と共存していた。科学者の実験で母星が滅びたため新たな居住地を求めている、人々が他の生物と共存できるか見定めるために地球に来た。これらの怪獣は化学兵器では倒せない。



【写真3・箱庭3】



【写真4・箱庭4】

43 回目以降、高校受験の話題が増える。Th に単位制について尋ねて「自分で授業を考えるより、決まってるほうがぼくにはよさそうだ」と普通科に決める。また、受験に向けての面接練習を希望して一緒に取り組む。今後の面接継続について、初めてAの希望を話し合う。継続を希望し、面接は「いろいろと遊べて、困った時に相談できる場所」だとAは語る。

日常では、Mo への反抗が強まる。人との関わりにくさに気づき始めて「ぼくは協調性がない」と言ったり、学力に見合った志望校を考えたりする。特定の友達と外出するようになる。

51 回目。高1に。かめを複数置き、蛇を巻きつけてやめる。中央にウルトラマン怪獣が現れ、2匹のかめが立ち向かう。Th は身が引き締まる思いがして、2匹のかめをAとTh のように感じる【箱庭5・写真5】。この頃から、Th の好きなテレビや音楽を予想し、Th に小さな頃から好きなものを聞く。学校は「わからんことだらけ。でも今のところなんとか大丈夫」と話す。54 回目。レゴを組み立てながら「うまくいかへんなー。どこから間違ってたんやろ」と、しんどさが伝わる。しばらく沈黙の後、部活やクラスの学力が高くて「しんどいな。正直やめたい」という。57 回目。たくさんの戦い場面ができる。ウルトラマンと怪獣が向かい合う。「まだ戦ってる…」と、怪獣にやられたウルトラマンを別のウルトラマンが「助けに」

来る【箱庭8】。61回目に初めて1人で来室。部活（テニス）で、「ダブルスでないとなんか勝てる気しない。フォローしなめあかんけど気持ちを支えてもらえる」。嫌なこともあるが「部活をやるために高校に入ったし、やんな意味ない。でも、中学のおれの暗黒時代を知ってる人のない学校でよかった」と話す。その後、子どもの頃に見た仮面ライダーについて「主人公はライダーとの出会いで本当の自分を見つけた。今やっとわかる」と感情をこめて話す。

65回目。「怪獣がめっちゃくちゃにした町をウルトラマンが助けに来」て、ウルトラマンと宇宙忍者バルタン星人が向かい合う【箱庭9・写真6】。倒し合うための戦いではないようにThは感じる。67回目。「新キャプテンもやめたし。なんか頑張っても（暴力沙汰が）なくならんかったし。自信失くしたんやろな。嫌気もさしたんやろな」と部活を休みたい気持ちも表す。そして、「ウルトラマンティガは仲間が死んで、ずっと孤独に戦ってた。だから仲間は大切にしなめあかんって言ってた」と話す。ティガは、滅び去った古代文明とその住人の守護者で、新たな時代を迎えようとする人類を守る存在として復活。ガンダムの1番好きどころは「戦争がなくなるように一生懸命戦ってるんや…」と話し、「でも、なくならんけどな」と表情が曇る。72回目。「仮面ライダーはそれぞれ悩みを持ちながら成長していく。龍騎は、鏡の中の怪獣（蛇）とつながらないと力を発揮できないのが面白い。奥が深くて子どものとき（に理解するのは）難しかったと思う」と語る。ウルトラマンや仮面ライダーは、古代からの力を借りて、敵を殺すのではなくつながって共存し、パワーをもらえるようになる。Aは、面接でも家でのお気に入りであるガンダムのプラモデル作りやレゴの組み立てを好み、全期間を通してプラモデルやレゴを手にしながらかつてることが多かった。



【写真5・箱庭5】



【写真6・箱庭9】

高校では、Aは担任の先生を慕って頼りにする。クラスや部活でも次第に特定の友達が出来始め、一緒に外出するようになる。新しく通いだめた塾では、男性の先生を慕う。

IV. 考察

1. Aの内的世界とメッセージ

(1) 英雄のイメージから

Aは、戦い続ける中で、さまざまな英雄や敵のイメージの変容を通して、内的世界を表現した。発達障がいを抱える人たちの心理療法では、しばしば戦い続けるテーマが見られる。こうした戦いの中で、英雄や、特に敵として表された蛇の変容はとても印象深い。

英雄の一般的属性は、ある社会や民族や集団が困難な状況に陥ったり、行き詰ったりしたときに超人間的な能力をもって現れて、その能力を駆使して戦い、状況を打開して人々を救い出すところにある。それらは、神話や伝説の中でその文化に属する人々のモデルになると同時に、普遍的無意識の中に時間や空間を越えて元型的に存在して、人の行動を規定すると考えられる。心理療法では、困難や行き詰まった状況を打開するために、普遍的無意識の中から元型的イメージである英雄が表れると思われる。Aが表した英雄からは、戦いのための真の強さを身につけるために重要なことが示されていく。ガンダムからは、母からの分離を試みることで、同性の仲間関係を築くこと、本当の敵を知ること、認識力を拡大させること、憎しみのためではなく守るために戦うこと、自分自身の影の部分を取り入れていくこと、「性別を持った身体像を獲得すること」(千原, 2002)である。そして、ウルトラマンや仮面ライダーからは、古代からの贈り物である力を借りて、敵を殺すのではなく共存するためにつながってパワーをもらうことである。Aが苦しい戦いの中で英雄的な力をも示して私たちに示してくれたメッセージは、全ての人が困難や行き詰まった状況を打開するために、大切なものだと思う。

(2) 蛇のイメージから

心理療法で、とくに箱庭や夢、描画の中でしばしば蛇のイメージが表れる。蛇のイメージについては、多くの人たちによってとりあげられ、その象徴性の高さが示されている。筆者の臨床経験の中では、発達障がいを抱える人たちの心理療法の中でより表れやすい実感がある。筆者が関わった他の事例でも、蛇の印象的なイメージが表れている。初回時18歳の女性は、対人面や知的な面での発達課題を抱えて入室していた。初回の箱庭で、蛇と同一のイメージである竜との戦いを表した。そして、影の部分を取り入れて、竜を殺すことなく向き合う。その後、縄文時代にまでさかのぼって竜とつながりをもつようになると、同時に自らの身体性ともつながることとなり、最後には竜は異世界との境界を司る門番のような守るものに変容した。

Aが初回の箱庭で表現した蛇のイメージを考えたときに、筆者にはまず西洋における近代自我の確立の過程を記したNeumann, E (1949)の考えが浮かんできた。Neumannによると、無意識のなかから意識や自我が発達してくるとき、ウロボロスに代わってまず表れてくるのがグレートマザーで、世界の諸民族の神話に広く見出される地母神のイメージからとったものとしている。そしてその後は、英雄による「竜との戦い」がテーマとなる。Neumannは竜をグレートマザーに限定するのではなく、原両親が分離してくるものとして捉え、母殺しや父殺しを重要とした。そしてその後に変容の過程がくるとする。

そうしたイメージを保持していたときに、筆者はある夢を見た。それは、迫ってくる蛇に対して対話することで、その後は道案内をしてくれるように変わるもので、蛇は亡くなった大切な人と出会える場所に連れていってくれることもあった。この夢は蛇を殺すことなく向き合ったからこそ、守るものとして変容したと思われた。それ以降筆者は、蛇や竜などは殺さずに出会うことが大切だというイメージを持つようになった。Dieckmann, H (1978)は、蛇が表れる事例から「人格の変容のためには、無意識からのしばしば苦痛を与える動物的な衝撃に身をさらさねばならない」として、「蛇をもちや敵意を抱く破壊的な存在としてではなく、自分自身の内部に存在する、治癒と助力をもたらさうる力と可能性として体験することを学ばなければならない」と考える。

蛇に表されるものは、自らの身体性や自然とつながり、対立や矛盾するものともつながるものだと思われた。豊田（2000, 2006）はこうした女性性を「女性的なスピリチュアリティ」と呼び、近代以降に次第に失われてきた、深い女性の知恵ともいえる、合理的な理性を超えた超越的な知恵とする。それは、対立するものを結び、ファンタジーや想像力の源泉となるが、それを回復していくことが、現代に生きる女性のみならず全ての人が本当の自信を持つために大切なことであると述べる。また、山口（2009）も女性にとっては、「母を殺さぬ出会い方」を考える必要があり、日本においては西洋とは異なった独自のテーマが見られるという。

Hillman, J（1972）が、アニマが男性の無意識に限定されるものではなく、西洋文化全体の無意識部分を人格化したものというように、西洋人の意識や自我発達には「竜などの母殺し」が重要とされたり、またキリスト教によって竜が悪とされたりしたことで、蛇に表わされる女性性のようなものが切り捨てられてきたように思う。日本における蛇信仰の起源（吉野, 1979）や、女神の起源（吉田, 1995）は縄文時代とされるが、Aが古代にまでさかのぼったあとに、蛇とつながりを持つようになったことは印象的である。日本だけでなく他の国々でも、蛇は古代人の信仰の対象であった。吉野（1979, 1982, 1989）は、古代の日本人にとって、あの世の主は「宇宙蛇」であり、その分身がこの世のさまざまな蛇に姿を変えていたとする。そしてそれらの蛇は、「祖霊としての蛇」や、「蛇とみなされる木々、山々、家屋など」、「仮に人間の姿をとった蛇」に分けられる。人間は元来蛇であり、「宇宙蛇」である主があの世界から来て、あの世界に戻る。誕生は蛇から人へ、死は人から蛇への変身である。また、田中（2000）は、吉野（1982）による蛇信仰の背景にある日本人の死生観に添いつつ、それと同様の論理が、Jung が示した四位一体の論理と類似し、そうした論理が、グノーシス主義や錬金術、さらには Jung の心理学そのものの背後に存在していたのではないかと論考する。この四位一体とは、キリスト教によって排除された悪や女性性なども含むものであり、吉野や田中の述べている蛇のイメージは、Aの表現した宇宙や異界、あの世を含み、敵などの悪や女性性も含む両性具有的なイメージに近い。

Aの示してくれたメッセージからは、蛇のようなものともつながることが、自らの身体性や自然とつながり、対立や矛盾するものともつながるために大切だと思われた。それは、現実の誰かに投影するのではなく、自分で引き受けて肯定的な面を見出すことでもあったと考えられた。

2. 発達障がいを抱える人たちの心理療法に表れるイメージ

蛇のようなものを殺すのではなくつながることが大切であるというイメージを持ちつつ、Aと出会いながら、Aが蛇を殺さないで済むにはどうしたらいいのかと問いを巡らせていた。そのとき、異類婚姻譚である『蛇女房』という昔話から筆者にあるイメージが浮かんだ。話のあらすじは次の通りである。1) 男が蛇を助ける。2) 女が訪ねてきて妻になる。3) 子どもを産むところを覗いてはならないと言って産屋に入る。4) 夫が覗くと妻は蛇になっている。5) 正体を見られた妻は、子どもを育てるための自分の目玉を与えて去る。6) 目玉がなくなって子どもの養育に困った男は、妻に会いに行き、妻はもう一つ目玉を与える。その後7) は分かれるが、盲目になった妻が夫と子どもの無事を知らせるための鐘をついてほしいと頼む、または子どもに与えた目玉を盗んだものに、復讐して洪水か地震を起こす。筆者に浮かんだイメージは、これ以上近くにいると子どもを呑み込んでしまうのではないかと、本当はそばで成長を見続けたいけれど栄

養だけは残して自分から身を引こう、そして身を引いた後には、自分の身も守りながら食べ物が必要ないように自然を守ろうというものであった。

セラピストは、クライアントとの関係でグレートマザーのイメージを投影される。そのグレートマザーには、包み込む肯定的な面と呑み込む否定的な面との両面がある。心理療法においては、母性や女性性が重要だと一般的にはいわれるが、セラピストはその肯定的な面だけではなく、呑み込むような影や否定的な面もまたきちんと意識しておかなければならないと思う。河合(1976)は、「萌芽としての弱い自我にとって、世界は自我を養い育てる母として映るか、あるいは出現し始めた自我を呑み込み、もとの混沌への逆行せしめる恐ろしい母として映るか、両面性をもったものとして認められるであろう」という。このことは、自我や自我境界が脆弱で侵入的な関わりをおそれる発達障がいを抱える人たちと出会っていくうえでは、より大切になるだろう。

出会い方によっては、目玉などの栄養を与えてくれたり、洪水や地震を起こして人の命を奪ったりすることもある蛇のイメージは、大いなる自然のイメージと重なり、あらゆるものを包含した普遍的無意識のイメージでもある。普遍的無意識は、自我にとってエネルギー源であると同時に、大きな心的エネルギーゆえに自我を破壊するように作用する。加藤(2003)は、普遍的無意識の脅威から自我を守る役割を個人的無意識であるとして、その代わりに、古代人は神事や神話、通過儀礼などの生活習慣によって守ってきたという。個人的無意識は自我にとって受け入れられないものが抑圧されて出来る層であるが、自我の脆弱な発達障がいを抱える人たちはこの層が積み重なりにくく、また現代では古代人が営んできた生活習慣も捨て去られている。常同行動や同一性保持などの儀式的反復的行動は、こうした現代に生きる発達障がいを抱える人たちの、心理的安定を得るための防衛機制なのかもしれない。発達障がいを抱える人たちにとってのこのようなお守りを容易にとるべきではないことや、普遍的無意識が洪水や地震のような脅威となりうることも、セラピストは肝に銘じておかないといけないと思う。そして、普遍的無意識から創造的な力を得られるような出会い方をつねに考えておく必要があるのではないだろうか。

3. 発達障がいを抱える人たちの心理療法

Aが初回と2回目の箱庭を通して表現した内的世界から、筆者には、周囲の世界が脅威に満ちて身動きがとれない様子や、わからない敵とやみくもに戦っている様子が感じられた。Aは言葉で気持ちを伝えることがないために、家や学校ではこころの中に抱える傷つきや葛藤を理解してもらいにくかったが、心理療法の場ではイメージを通して筆者に教えてくれた。こうしたAとの出会いで、発達障がいを抱える人たちの心理療法において個性化に寄り添うセラピストに求められるのは、その人たちの内的世界を尊重し、私たちに伝えてくれるメッセージに耳を傾けることであり、そうして内的世界やメッセージに添っていくことで、その人たちに必要なテーマが自ずと表れてくるように筆者は思ってきた。

Aのように、知的に高い発達障がいを抱える人たちは、周囲からは障がい理解されにくく、学力の高さから学校では普通学級に在籍することも多い。そのため周囲に合わせるように要求されたり、その人たち自身も規則や指示に忠実であるために過剰適応になりやすい。発達障がいの広汎性で特異性に配慮した治療教育アプローチや心理教育プログラムなどの具体的な援助は、発達障がいを抱える人たちの“今ここでの適応”を支え、守りになっていると思われる。しかし、

行動など外に表れる部分だけを援助して内的世界は扱われないために、言葉で内界を語ることに困難がある人の傷つきや葛藤は理解されにくく、主体性も育ちにくいように筆者は考えている。特にアイデンティティ獲得が課題となる思春期や青年期には、外界との関わりや自己が再体制化され、内界の変化をもたらすときは心理的危機を招くこともある。「自閉症児は、自己の連続性の基盤となる、断片化したものをつないで統合する力が弱く、そのことがアイデンティティ形成の難しさにもつながる」(山上, 1999)と言われる。高橋(2009)が青年期の課題としてエリクソンのアイデンティティ確立をもとにまとめているように、自分について、まわりの仲間とたちと比べてどのような個性をもっているかという斉一性、自己の歴史を振り返って今を見つめるという連続性の二つの側面からとらえることは大切である。Aも面接を通して、他者と比べて自分自身について気づき、子どもの頃からのことを振り返ることになったと思われた。

Kast, V (1985) は、クライアントのイメージから、セラピストにイメージや夢、昔話が浮かぶような Fordham, M の「同調的な逆転移」は、「被分析者の中にある感情や無意識的の配置に対応し」、治療的に意味があるという。河合(1979)も、「治療者が自分の個性や特性によって、クライアントを「治す」というイメージではなく、治療者とクライアントとに共通に constellate されたものに対する対決を通じて、共に個性化を歩む」という治療的イメージをあげて逆転移の治療的有効性について述べている。こうした逆転移について、発達障がいを抱える人たちの心理療法での有効性を、Alvarez, A (1992) は指摘している。

V. おわりに

心理療法は一般に相互的なプロセスとしてとらえられるが、クライアントのイメージに添って出会っていくときに、セラピストのイメージもクライアントの表現に少なからず影響を与える。そのことをつねに念頭におき、セラピストのイメージを見直しながら、クライアントやクライアントの表現するイメージに出会っていく必要がある。クライアントやセラピストのイメージは、発達障がいを抱える人たちの心理療法において、大切な手がかりになると筆者は思う。

文献

- Alvarez, A (1992) *Live Company*. Routledge & Kegan Paul, London. 『こころの再生を求めてーポスト・クライン派による子どもの心理療法』[千原雅代・中川純子・平井正三訳] (2002) 岩崎学術出版社
- Hillman, J (1972) *The Myth of Analysis*. Northwestern University Press, Evanston, Illinois.
- 平井正三 (2008) 「象徴化という視点からみた自閉症の心理療法ーポスト・クライン派の精神分析的見地からの一試論」『心理臨床学研究 26 (1)』
- 皆藤章 (1998) 『生きる心理療法と教育ー臨床教育学の視座から』誠信書房
- Kast, V (1986) *Marchen als Therapie*. 『童話を活かす心理療法』[吉本千鶴子訳] (1989) 創元社
- 加藤寛 (2003) 「意識と無意識の関係 個人的無意識の肯定的側面」『岐阜聖徳学園大学紀要 44』
- 河合隼雄 (1976) 『母性社会日本の病理』中央公論社
- 河合隼雄 (1979) 「逆転移の治療的有効性」『臨床心理事例研究 6』京都大学教育学部心理相談室

- Kawai, Toshio (2009) Union and separation in the therapy of pervasive developmental disorders and ADHD. *Journal of Analytical psychology* 54-5
- Neumann, E (1949) *The Origins and History of Consciousness*. Routledge & Kegan Paul, London.
- 『意識の起源史 改定新装版』林道義訳 (2006) 紀伊国屋書店
- 杉山登志郎 (2007) 『子ども虐待という第四の発達障害』学研のヒューマンケアブックス
- 高橋靖恵 (2009) 「青年期の心理療法と家族のライフサイクル」[高橋靖恵編]『家族のライフサイクルと心理臨床』金子書房
- 滝川一廣 (2007) 「発達障害再考—診断と脳障害論をめぐって」『そだちの科学8』
- 滝川一廣 (2008) 『発達障害』をどう捉えるか」[松本雅彦他編]『発達障害という記号』批評社
- 田中康裕 (2000) 「日本の蛇信仰の論理：象徴的なもの、あるいはイマジナルなものは常に心理学的でありうるのか?」『箱庭療法学研究13』
- 田中康裕 (2008) 「成人の発達障害の心理療法」[伊藤良子編]『京大心理臨床シリーズ7「発達障害」と心理臨床』創元社
- Dieckmann, H (1978) *Träume als Sprache der Seele: Einführung in die Traumdeutung der Analytischen Psychologie* C. G. Jungs. Fellbach: Verlag Adolf Bonz GmbH. 『魂の言葉としての夢—ユング心理学の夢分析—』野村美紀子訳 (1988) 紀伊国屋書店
- 十一元三 (2006) 「広汎性発達障害の発達論的療育モデル：基本障害の捉え方の進展と「サーツ・モデル」」『精神療法32(1)』
- 千原雅代 (2002) 「自閉症に対する遊戯療法(特集 遊戯療法)」『臨床心理学2(3)』金剛出版
- 豊田園子 (2000) 「女性的なスピリチュアリティと心理療法」[河合隼雄編]『ユング派の臨床』金剛出版
- Toyoda, Sonoko (2006) *Memories of Our Lost Hands*. Texas A&M University Press.
- 内山登紀夫 (2004) 森口奈緒美『変光星 自閉の少女に見えていた世界』への解説 花風社
- Williams, D (1991) *Somebody Somewhere II: Breaking Free from the World of Autism*. Robinson Publishing. 『自閉症だったわたしへ2』高野万里子訳 (2001) 新潮社
- Wing, L (1981) *Asperger's syndrome: A clinical account*. *Psychological Medicine* 11 『アスペルガー症候群：臨床知見』(2000) 星和書店
- 山上雅子 (1997) 『物語を生きる子どもたち—自閉症児の心理療法—』創元社
- 山上雅子 (1999) 『自閉症児の初期発達—発達臨床的理解と援助—』ミネルヴァ書房
- 山上雅子 (2007) 「自閉症スペクトラム障害と愛着研究の進歩」『京都女子大学大学院発達教育学研究科博士後期課程研究紀要 発達教育学研究1』
- 山口素子 (2009) 『山姥、山を降りる 現代に棲まう昔話』新曜社
- 吉田敦彦 (1995) 『日本人の女神信仰』青土社
- 吉野裕子 (1979) 『蛇 日本の蛇信仰(ものと人間の文化史32)』法政大学出版局
- 吉野裕子 (1982) 『日本人の死生観 蛇信仰の視座から』講談社
- 吉野裕子 (1989) 『山の神 易・五行と日本の原始蛇信仰』人文書院

(臨床実践指導学講座 博士後期課程2回生)

(受稿2009年9月7日、改稿2009年11月30日、受理2009年12月11日)

Images Induced during Psychotherapy of Patients with Developmental Disorders

YUKAKO Nakai

This paper intends to obtain deeper insight into the inner world of patients with developmental disorders, the messages they send to therapists, and ideal psychotherapy. As a step toward this objective, images induced during psychotherapy were used. In the case of a patient described here, images of heroes and enemies, such as a snake, gradually changed as both parties fought each other over a given period. In Western countries, it is conventionally assumed that “fighting off a dragon (snake)” by a hero is common in psychotherapy; on the other hand, the patient’s and therapist’s images suggest that a newly established relationship with the snake is important to associate the patient with his own corporeality and the outer natural environment. This unavoidably leads to involvement in conflicts and contradictions. The patient needs to be open with the snake to reflect his inner collective unconscious, instead of killing to obtain creative power. However, a mistake made in introduction of the snake might have adverse effects on the patient, who may view it as a threat, and on the therapist as the patient’s opponent. Thus the findings of this study may be of interest to therapists who treat patients with developmental disorders.